

『となりにいる理由——にゃんこ加入の日』

ある雨上がりの朝。街には、まだ夜の匂いが残っていた。濡れた石畳。軒先から落ちる雫。雲の隙間から差し込む朝日が、ところどころ水溜まりを白く光らせている。ヨルファミリア本部もまた、いつもと変わらない朝を迎えていた。

——ただし。

「あめちゃん」

「んー？」

「それ私のパン」

「一枚くらいいいじゃん」

「よくない」

「ケチー」

「昨日も食べたでしょ」



「昨日は昨日。今日は今日」

「意味分かんない」

そんな声が大食堂に響いている。ヨルは紅茶を飲みながら眺めていた。まふいはいつものように、そのすぐ隣。レモンは呆れながら笑っている。そして、約一年前、この場所を自分の帰る場所にすると決めたあめちゃんは――

もうすっかり馴染んでいた。

「最後の一口もーらい」

「ちょっと！」

「あはは！」

自由。気まま。どこか掴みどころがない。けれど以前とは違う。今のあめちゃんは、出かけたあとに戻ってくる。

「ただいま」と言う。

そして誰かが、



「おかえり」

と答える。そんな日々が当たり前になった頃だった。もう一人の少女が、ヨルファミリアの扉を叩いたのは。

第一章 猫みたいな子

コンコン。昼過ぎ。本部の正面玄関を、小さく叩く音がした。

「誰か来た？」

あめちゃんがソファから顔を上げる。

「私見てくる」

レモンが玄関へ向かおうとした、その時、

「私行く」

ヨルが先に立った。扉を開ける。そこにいたのは、一人の少女だった。

「……………」



ヨルと少女が見つめ合う。少女は何も言わない。ヨルも、とりあえず待つ。十秒。二十秒。

「……………」

「……………」

やがてヨルが耐えられなくなった。

「えっと……何か用？」

少女が答える。

「ヨル？」

「そうだけど」

「本物？」

「たぶん」

「たぶん？」

「自分では本物だと思ってる」



少女はじっとヨルを見る。疑い深い目。まるで野良猫のようだった。

「……思ってたのと違う」

「初対面で結構失礼だね？」

その声を聞いて、あめちゃんも玄関へやってくる。

「何してるの？」

「お客さん」

「客じゃない」

少女が即座に訂正した。

「じゃあ何？」

「……………」

少女は少し黙った。そして、

「入りたい」

「どこに？」



「ヨルファミリア」

さらっと言った。

「……………」

ヨル。

「……………」

あめちゃん。二人が顔を見合わせる。

「急だねえ」

あめちゃんが言う。

「ダメ？」

「私に聞かれても」

ヨルが少女を見る。

「名前は？」

「にゃんこ」



「……にゃんこ？」

あめちゃんが反応する。少女——にゃんこが、少しむっとする。

「何」

「いや」

あめちゃんは口元を押さえる。

「可愛い名前だなんて」

「……………」

「怒った？」

「別に」

「怒ってるじゃん」

「怒ってない」

「絶対怒ってる」

第一印象。あめちゃんから見たにゃんこは——



面白い子。

そして、にゃんこから見たあめちゃんは——

うるさい人。

最悪とまではいかない。だが、少なくとも二人とも、この時点では後に互いを「相棒」と呼ぶようになるなんて、欠片も思っていなかった。

第二章 加入試験

ヨルファミリアは、誰でも無条件に入れる場所ではない。ヨル自身が連れてきたあめちゃんは特殊な例だった。だから、にゃんこには簡単な実力確認が行われることになった。室内訓練場。

「相手は？」

にゃんこが尋ねる。ヨルが少し考える。そして——

「あめちゃん」



「え、私？」

ソファで寝転がっていたあめちゃんが飛び起きる。

「ちょうどいいから」

「雑！」

にゃんこがあめちゃんを見る。

「この人と？」

「この人って言った？」

「あめちゃんでしょ」

「知ってるじゃん」

「さっき聞いたから」

「記憶力いいねえ」

「普通」

あめちゃんが立ち上がる。



「まあいいや」

軽く身体を伸ばす。

「よろしく、にゃんこ」

「よろしく」

二人が向かい合う。ヨルが告げる。

「勝ち負けはどうでもいいよ」

にゃんこが眉を寄せる。

「じゃあ何を見るの？」

「それを今から見る」

「……変なの」

「ヨルは大体こんな感じ」

あめちゃんが笑う。

「慣れた方がいいよ」



「まだ入るって決まってない」

「入る気満々で来たんじゃないの？」

「……………」

「凶星？」

「うるさい」

開始。にゃんこが先に動いた。速い。迷いが無い。必要最低限の動きで距離を詰める。

「あ」

あめちゃん表情が変わる。軽い気持ちで受ければ危ない。即座に回避。反撃。にゃんこも避ける。一進一退。数度の攻防。そして——あめちゃんは気付いた。この子。

全部、一人でやろうとしてる。

攻撃。防御。索敵。退路確保。敵の誘導。何も他人に頼らないことを前提にした戦い方。完成度は高い。だが、どこか息苦しい。



「あめちゃん？」

ヨルが呼ぶ。

「んー」

戦いながら返事をする。

「何か分かった？」

「ちょっとね」

にゃんこが踏み込む。あめちゃんが攻撃を受け流す。至近距離。視線が合う。あめちゃんが笑った。

「にゃんこさ」

「何」

「友達少ないでしょ」

「……………は？」

動きが止まった。その際にこつん。あめちゃんがにゃんこの額を指で突いた。



「はい、隙あり」

「……………」

にゃんこの頬が引きつる。

「今」

「ん？」

「関係ないよね？」

「あるかも」

「ない」

「怒った？」

「怒ってない」

「今日二回目」

「……もう一回やる」

「え」



「今のなし」

「いや勝敗どうでもいいってヨルが——」

「もう一回」

「目が怖いって！」

遠くからヨルが笑っていた。その日の実力確認は結局、予定より随分長く続いた。

第三章 新しい席

「合格」

ヨルの一言で決まった。

「……それだけ？」

にゃんこが聞く。

「うん」



「もっと何かないの？」

「おめでとう？」

「疑問形……」

その日の夕方。にゃんこは正式にヨルファミリアの一員となった。後に席次が確定し、

第8席。

その座に就く少女。だが、加入したばかりのにゃんこには、一つ問題があった。

「にゃんこー」

「……………」

「にゃんこってば」

「……………」

「あれ、聞こえてない？」

「聞こえてる」



「じゃあ返事してよ」

「用事ないでしょ」

「ないよ」

「なら返事する必要ない」

「冷たっ」

あめちゃんだった。妙に絡んでくる。食事中も。

「隣いい？」

「他空いてる」

「ここがいい」

訓練中も。

「一緒にやる？」

「一人でいい」

廊下でも。



「どこ行くの？」

「部屋」

「私も行こ」

「なんで？」

「暇だから」

「来ないで」

「ひどい！」

にゃんこには理解できなかった。

「あの人、何なの」

ある日。とうとうヨルに聞いた。

「あめちゃん？」

「うん」

「なんでずっと絡んでくるの」



ヨルが笑う。

「気に入られてるんじゃない？」

「困る」

「嫌い？」

「……………」

即答できない。嫌い。ではない。ただ、どう接していいか分からない。今まで、こんなに遠慮なく距離を詰めてくる人間がいなかった。

「一人の方が楽」

にゃんこは言った。ヨルの表情が少し変わる。どこかで聞いた言葉だった。少し前。雨の中で、あめちゃんも、同じことを言っていた。だからヨルは。

「そっか」

それ以上何も言わなかった。



第四章 初任務

にゃんこ加入から数日後。初めて任務が与えられた。簡単な調査。戦闘になる可能性は低い。にゃんこにとっては、ヨルファミリアでの初仕事。

「じゃ」

ヨルが言う。

「二人で行ってきて」

にゃんこが聞き返す。

「二人？」

その隣。

「よろしくー」

あめちゃんが手を振っている。

「……………」

「その顔何？」



「一人でできる」

にゃんこがヨルを見る。

「だろうね」

「なら」

「でも二人で」

「どうして？」

ヨルは笑った。

「総帥命令」

「ずるい」

「便利でしょ？」

「横暴」

「いってらっしゃーい」

半ば追い出される形で出発した。



道中。

「……………」

「……………」

無言。一分。五分。十分。あめちゃんが耐えられなくなる。

「なんか喋ろ？」

「何を？」

「好きな食べ物とか」

「なんで？」

「仲良くなるため？」

「任務に必要？」

「必要ない」

「じゃあいい」



「手強いなあ……」

にゃんこが先を歩く。あめちゃんがその後ろをついていく。

「じゃあ私から言うね」

「聞いてないけど」

「私ね——」

「聞いてない」

「あっ、猫！」

「どこ？」

にゃんこが即座に振り返る。

「……………」

「……………」

あめちゃんがニヤツとする。

「猫好きなんだ？」



「……………」

「にゃんこだけに？」

「……帰る」

「ごめんごめんごめん！」

初めて、にゃんこのことを一つ知った。ほんの些細なこと。
けれど、あめちゃんには、それが妙に嬉しかった。

第五章 想定外

調査自体は順調だった。問題が起きたのは、帰り道。敵対勢力の小队と遭遇した。

「八人」

にゃんこが数える。

「あっちにもいる」

あめちゃんが示す。追加で四人。計十二。



「やれる？」

「できる」

にゃんこが即答する。

「あめちゃんは下がってて」

「……え？」

「あとは私がやる」

「いやいや」

あめちゃんが並ぶ。

「一緒にやろうよ」

「必要ない」

「でも——」

「足手まといになるかもしれない」

その言葉にあめちゃんの顔から笑みが消えた。



「……私が？」

「違う」

にゃんこは前を見たまま言う。

「私が」

「……………」

「あめちゃんの動きをまだ全部知らない」

淡々とした声。

「私が合わせられなかったら、あめちゃんまで危なくなる」

だから、一人で戦う。その方がいい。その方が誰も巻き込まない。にゃんこは踏み出そうとする。腕を掴まれた。

「待って」

あめちゃんだった。

「離して」

「嫌」



「あめちゃん」

「それ、優しいんじゃないよ」

にゃんこの目が僅かに揺れる。

「何？」

「全部一人で背負ってるだけじゃん」

「……………」

「私が危ないかどうかを決めるのは、私でしょ？」

にゃんこが答えない。

「私、そんなに頼りない？」

「そういう意味じゃ——」

「じゃあ」

あめちゃんは手を離れた。そして、にゃんこと同じ位置まで歩く。肩を並べる。

「一回くらい頼ってみてよ」



「……………」

「あとは私が勝手に合わせるから」

「そんな簡単に……」

「できなかったら？」

あめちゃんが笑う。

「二人で逃げよう」

あまりに軽い。にゃんこは呆気にとられた。

「……何それ」

「いい作戦じゃない？」

「作戦ですらない」

「でも一人で逃げるより二人の方が楽しいよ」

「逃げる時に楽しさ必要？」

「大事」



「意味分かんない」

それでも、ほんの少しだけ。にゃんこの口元が緩んだ。

「……分かった」

「え？」

「やる」

にゃんこが構える。

「一緒に」

あめちゃんが目を見開く。そして、満面の笑み。

「了解！」

それが二人が初めて並んで戦った瞬間だった。

第六章 背中

最初は噛み合わなかった。



「あめちゃん右！」

「そっち!？」

「右！」

「私から見て!？」

「普通自分からでしょ！」

「言うの遅い！」

危うくぶつかる。

「ごめん！」

「集中して！」

それでも、少しずつ。にゃんこが敵を引きつける。あめちゃんが死角を取る。あめちゃんが崩した相手を、にゃんこが仕留める。にゃんこが防げない一撃を、あめちゃんが逸らす。一回。二回。三回。やがて――

「あめちゃん」



「ん？」

「三秒」

それだけ。

「了解」

意味を聞かなかった。三秒後。あめちゃんが伏せる。その頭上を、にゃんこの攻撃が通過する。敵だけを吹き飛ばす。

「おお！」

あめちゃんが振り返る。

「今のよかった！」

「前！」

「はいはい！」

次。あめちゃんが叫ぶ。

「にゃんこ！」



それだけ。にゃんこは振り向かない。身体を横へずらす。直後、背後から飛び込んできた敵を、あめちゃんが迎撃。

「……！」

気付いた。今。自分は。

後ろを確認しなかった。

敵がいるかもしれない。攻撃されるかもしれない。それなのに、あめちゃんが呼んだから、大丈夫だと思った。ほんの一瞬。無意識に自分の背中を——他人に預けた。にゃんこの胸が、不思議にざわつく。怖くない。むしろ。

今までより身体が軽い。

「にゃんこ！」

「分かってる！」

二人が同時に踏み込む。最後の敵が倒れた。静寂。

「……………」



「……………」

そして――

「あー疲れたあ！」

あめちゃんが地面に座り込んだ。

「ちょっと」

「無理ー」

「こんなところで座らないで」

「にゃんこも座ろ」

「嫌」

「あ」

「何？」

「手、震えてる」

にゃんこが自分の手を見る。僅かに震えていた。戦闘への恐怖ではない。自覚したからだ。もし。あめちゃんがあそこで



間に合わなかったら。もし、自分が判断を間違えていたら。
二人とも。

「……………」

にゃんこが俯く。その時、ぽん。頭に何かに乗った。あめちゃんの手。

「大丈夫」

「……何が」

「分かんないけど」

「分かんないのに言わないで」

「じゃあ」

少し考える。

「私、生きてる」

にゃんこが顔を上げる。あめちゃんは笑っていた。

「にゃんこも生きてる」



「……………」

「じゃあ今日はそれでいいじゃん」

にゃんこはしばらく黙っていた。やがて、小さく。

「……うん」

初めて、あめちゃんの前で、素直に頷いた。

第七章 橋の上

帰り道。夕暮れ。二人は古い橋を渡っていた。川面が夕陽に染まっている。

「あめちゃん」

「んー？」

「さっき」

「うん」



「怖くなかった？」

あめちゃんは少し考えた。

「怖かったよ」

「……………」

にゃんこは意外そうに見る。

「怖いんだ」

「そりゃ怖いよ」

「ずっと笑ってたから」

「笑ってた方が楽じゃん」

あめちゃんらしい答えだった。

「にゃんこは？」

「……怖かった」

「そっか」



否定しない。笑わない。あめちゃんはただ歩く。

「でも」

にゃんこが続けた。

「一人の時とは違った」

「どう？」

「……………」

言葉を探す。上手く表現できない。

「逃げなくてもいい気がした」

あめちゃんの足が止まる。にゃんこも止まる。

「誰かがいるから？」

「多分」

「それ私？」

「……………」



「ねえねえ」

「近い」

「私？」

「……そう」

小さな声。あめちゃんの顔がぱっと明るくなる。

「ほんと！？」

「声大きい」

「嬉しい！」

「近いって」

あめちゃんがにゃんこの肩に腕を回す。

「やったー！」

「重い！」

「にゃんこに認められた！」



「そこまで言ってない！」

「言ったようなもんじゃん！」

「違う！」

にゃんこは文句を言いながらもその腕を振りほどかなかった。
橋の上。長く伸びる影がいつの間にか、一つになるくらい近く並んでいた。

第八章 おかえり

ヨルファミリア本部。扉が開く。

「ただいまー！」

あめちゃんの声。すっかり彼女の日常になった言葉。奥から
ヨルが顔を出す。

「おかえり」

その後。一步遅れて、にゃんこが入ってくる。



「……………」

まだ慣れない。この場所に帰ってくることにも誰かが待っていることにもヨルがにゃんこを見る。

「おかえり、にゃんこ」

「……………」

一瞬だけ戸惑う。そして――

「……ただいま」

言えた。その横で、あめちゃんが嬉しそうに笑っている。

「何」

「別にー」

「絶対何かある」

「ないない」

「顔がうるさい」

「顔! ?」



ヨルは二人を見る。出発前とは明らかに違う。

「仲良くなった？」

「なってない」

にゃんこ即答。

「なったよ！」

あめちゃん即答。

「なってない」

「一緒に戦ったじゃん！」

「それとこれは別」

「背中預けてくれたじゃん！」

「……なんで言うの！」

「え、秘密だった？」

「もういい！」



にゃんこが部屋へ向かう。

「あ、待ってよ！」

あめちゃんが追う。その背中を見ながら、ヨルが笑った。

「いいコンビかもね」

まふいが隣から見る。

「ヨルがそう思うなら」

「うん」

ヨルは確信していた。まだ二人は知らない。今日生まれた小さな信頼がこれから何度も互いを救うことになる。

第九章 二人で

それから、二人で任務に出ることが増えた。最初は偶然。次はヨルの指示。その次からは――

「にゃんこ行こ」



「どこ」

「任務」

「分かってる。場所」

「あっち」

「ざっくりしすぎ」

自然と二人で行くようになった。戦い方も変わった。

「あめちゃん、左」

「了解」

説明はいらない。

「にゃんこ、飛んで！」

「分かった」

理由を聞かない。

「任せた！」



「うん！」

それだけで動ける。日常でも食事の席はいつの間にか隣。中庭回廊で昼寝する時も隣。あめちゃんが出かければ、にゃんこが「どこ行っただの」と聞く。にゃんこが一人で訓練していれば、あめちゃんが当然のように横へ来る。

そんなある日。二人で任務から帰る途中だった。

「あー疲れた」

「今日ほとんど私がやったでしょ」

「精神的に疲れた」

「何それ」

「にゃんこが働き者だから」

にゃんこが足を止める。

「それ、褒めてる？」

「もちろん」



「……………」

「何、その顔」

「別に」

にゃんこが先に歩き出す。あめちゃんは笑って、その隣へ追いついた。二人の肩が、自然に並んだ。

終章 となりにいる理由

ずっと後。ヨルファミリアの席次が完成する。

第7席——あめちゃん。

第8席——にゃんこ。

偶然なのか。ヨルの意図なのか。二人の席は隣になった。

「あめちゃん」

「ん？」



「近い」

「席が隣なんだからしょうがないじゃん」

「椅子まで寄せる必要ないでしょ」

「こっちの方が話しやすい」

「普通に聞こえる」

「いいじゃん」

「……まあいいけど」

昔なら。絶対に言わなかった言葉。一人の方が楽だった。誰かを信じなければ、裏切られることも失うこともない。けれど、それでは知ることができなかった。自分が前だけを見て走れる安心を怖い時に「怖い」と言えることを。

帰った時、隣から聞こえる声を。

「あめちゃん」

「なに？」



「今日も一緒に行く？」

「もちろん」

にゃんこが立ち上がる。あめちゃんも立つ。

「どこまで？」

あめちゃんが聞く。にゃんこは少し考えた。そして、笑う。

「最後まで」

「……うん！」

肩を並べて歩き出す。最初から特別だったわけじゃない。運命的に惹かれ合ったわけでもない。初対面では、

「うるさい人」

だと思った。相手からは、

「面白い子」

だと思われた。何度も言い合った。何度も呆れた。距離感の違いに困ることもあった。それでも、一度、背中を預けた。



次は、もう少し長く。その次は、迷わず。そうやって積み重なった信頼に、ある日。名前がついた。

相棒。

ヨルファミリア第7席・あめちゃん。ヨルファミリア第8席・にゃんこ。二人が強い理由は、決して二人でなければ戦えないからではない。どちらも、一人で戦える。一人で歩ける。一人でも生きていける。それでも、

一人で行ける道を、二人で歩くことを選んだ。

だから二人は——相棒なのだ。そして今日もヨルファミリア本部の中庭回廊から声がする。

「にゃんこー、こっち来て！」

「なんで？」

「寝る」

「一人で寝れば？」

「相棒でしょ？」



「それ便利な言葉みたいに使わないで」

「じゃあ友達！」

「……………」

「親友！」

「……………」

「大好きなにゃんこ！」

「うるさい！」

「顔赤いよ？」

「赤くない！」

結局。にゃんこは隣に座る。

「えへへ」

「何」

「来てくれた」



「……うるさいから」

「うん」

あめちゃんはそれ以上聞かない。にゃんこもそれ以上説明しない。青空の下。肩と肩が触れる。風が吹く。あの日。一人で戦おうとした少女には今、安心して背中を向けられる相手がいる。

そして、帰る場所を知らなかった少女には今、帰った時、真っ先に会いたい相手がいる。二人は何も言わず、同じ空を見上げた。離れる理由がないから。ただ、隣にいる。それだけでよかった。

END

